

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 11 日現在

機関番号：44317

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24330183

研究課題名(和文) 東日本大震災における遺族への心理社会的支援プログラムの開発と検証に関する研究

研究課題名(英文) A psychosocial support program for bereaved families that survived the Great East Japan Disaster: Study on developing an effective program and evaluation of the program

研究代表者

黒川 雅代子 (KUROKAWA, Kayoko)

龍谷大学短期大学部・社会福祉学科・准教授

研究者番号：30321045

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 14,200,000円

研究成果の概要(和文)：大規模災害後の行方不明者を含む遺族やその支援者のための支援プログラムの開発と検証に努めた。被災地支援者のニーズ・ストレス調査をもとに、行方不明者を含む遺族支援、支援者のストレス対策の研修会を実施し成果を得た。岩手、宮城、福島で子どものグリーフプログラムを開発、実施した。複雑性悲嘆の集団認知行動療法を開発し、その有用性を検証した。Wagnerによる認知行動療法プログラムの日本語版を開発し、インターネットによる複雑性悲嘆の治療プログラムの開発研究を実施した。P. Boss博士の「あいまいな喪失」の書籍を翻訳した。各成果発表については学会・学会誌等で報告、論文化した。

研究成果の概要(英文)：To support families of missing persons and help local professionals in the disaster-hit areas, we developed a psychosocial support program and evaluated effectiveness of the program. With need-assessment targeted local professionals, we launched several projects, including: a stress-management workshop to support families with missing persons, families who lost loved ones, and local professionals to help them; and a grief program for children provided in Iwate, Miyagi and Fukushima. We also developed a cognitive behavioral group therapy for complicated grief, and assessed effectiveness of the approach. In addition, we developed a Japanese version of Wagner's cognitive behavioral therapy program to treat complicated grief symptoms through the Internet, and published a translated book of "Ambiguous Loss" authored by Dr. Pauline Boss. Regarding the outcomes of the projects, we produced several reports, presented them at annual conferences, and published them through academic journals.

研究分野：社会福祉学

キーワード：遺族支援 行方不明者家族支援 支援者支援 あいまいな喪失 複雑性悲嘆 認知行動療法 子どものグリーフサポート 子どものグリーフプログラム

研究課題：東日本大震災における遺族への心理社会的支援プログラムの開発と検証に関する研究

1. 研究開始当初の背景

死別に伴う悲嘆は、本来正常な反応であり、時間の経過とともに回復する過程を経る (Parks, 1996)。しかし、遺族の中には、悲嘆の苦痛が長期にわたり軽減しない人々がいる。このような慢性化した悲嘆は、複雑性悲嘆 (Complicated grief) や遷延性悲嘆障害 (Prolonged grief disorder) (Prigerson et al., 2008) と呼ばれており、特に、犯罪や災害などの突然の死別の遺族に多い。

2011年3月11日、三陸沖を震源に国内観測史上最大の M9.0 の地震 (以下、東日本大震災) が発生し、2015年2月末現在の被害状況は、死者は12都道県で1万5890人、行方不明者は6県で2589人であった。この震災で、10万人以上の人々が近親者を突然亡くするという体験をしたと考えられる。

わが国の被災者のメンタルヘルス研究の先駆けは、1995年1月17日に起こった阪神・淡路大震災である。阪神・淡路大震災以後、心的外傷後ストレス障害 (Posttraumatic stress disorder: PTSD) の診断・治療についての研究も進んだ。しかし、研究はいずれも被災者としての枠組みであり、震災で死別した遺族支援のための研究はなされてこなかった。スマトラ沖津波によるノルウェー人の遺族では、死別から2年後に複雑性悲嘆に陥った人は、23.3%であった (Kristensen et al., 2009)。東日本大震災における遺族は、複数の家族、家、財産、仕事、コミュニティ等多くのものを同時に喪っている可能性がある。また遺体が見つからない人も多く、その場合は死を受容できず、正常な死別悲嘆のプロセスをたどる事がさらに困難となる。これらの理由から今回の震災では、遺族が複雑性悲嘆になる可能性は通常より高いと言える。複雑性悲嘆は、精神的、身体的健康や QOL に影響を与えることが報告されている (Prigerson et al., 1997; Boelen et al., 2008) 事から、専門的な支援や治療が必要であると考えられている。特に被災地である東北地方は、精神医療的な資源が少なく、さらに日常生活を支援する社会福祉的資源もかなり被災している状況にある。そのため、遺族に対しての心理社会的な支援プログラムの開発は、急務であり重要な課題であると認識した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、東日本大震災で突然家族を喪った遺族への心理社会的支援プログラムを開発し、そのプログラムの有用性を検証することである。遺族への心理社会的支援プログラムとは、支援者研修プログラム、遺族・遺児支援プログラム、複雑性悲嘆の認知行動療法プログラム (集団プログラム、

インターネット治療プログラム) から構成される。

3. 研究の方法

(1) 支援者研修プログラム

日本には災害時の遺族支援ツールがないため、海外の遺族支援のツールや、海外研究者からの情報を参考にツールの開発やプログラムの作成を行った。研修プログラムは、実際に被災地の支援者に対して実施し、参加者のアンケートを参考に、改変や洗練化をはかった。特に行方不明者支援については、海外の研究者を招聘したり、継続的にコンサルテーションを受けたりし、支援者研修プログラムを検討した。また、聞き取りやアンケートを通して支援者自身の疲労、ニーズ等の現状を把握し、それを考慮した研修内容を吟味し、プログラムを継続的に実施した。

(2) 遺族・遺児支援プログラム

大切な人を亡くした子どものためのグリーフプログラムを開催するために、地域へ子どものグリーフに関する理解を求める啓発講演を行い、グリーフプログラムのためのボランティア養成を行った。子どものグリーフプログラムは地域の事情に合わせ月1~2回で開催した。保護者のプログラムも並行して行った。

プログラム参加者の参加の様子をボランティアの振り返りシートを用いて評価するとともに問題のあるケースに関してはケース検討会を開催し専門家によるアセスメントを行い、介入を検討した。また、保護者へ面談をし、現行支援の評価を行った。子どものグリーフサポートを先駆的に行っている米国の団体 Kids Hurt Too へ研修に行き、現行プログラムへの評価と示唆をもらった。

(3) 複雑性悲嘆の認知行動療法プログラム (集団プログラム、インターネット治療プログラム)

集団プログラムについては、1年以上前に死別を経験した健常成人で、重篤な複雑性悲嘆 (Brief Grief Questionnaire 8) および、重篤なうつ状態 (Beck Depression Inventory, 以下 BDI-25) を満たさないものを対象とし、複雑性悲嘆の集団認知行動療法 (全6回、1回/2週、6人/グループ) に実際に参加してもらい、治療前後で、複雑性悲嘆症状 (Inventory of Complicated Grief), 抑うつ症状 (BDI-25), QOL (SF-8) の評価およびプログラムの有用性、有害事象についての評価を行った。研究の実施にあたっては、国立精神・神経医療研究センター倫理審査委員会の承認を得た。この研究における COI は存在しない。

インターネット治療プログラムについては Wagner による認知行動療法プログラムの日本語版を開発し、親族等との死別から13カ月以上経過している中~軽程度の複雑性

悲嘆を主訴とする 20 歳以上の遺族を対象に、電子メールの送受信によって本法を実施した。対象者は設定された筆記課題を 10 回(約 5 週間)行い、偶数回に担当者より対象者に応じた内容の心理教育とフィードバックの返信を受け取った。評価尺度は複雑性悲嘆の重症度 Inventory of Complicated Grief(ICG)、抑うつ症状、不安症状、PTSD 症状を実施前、各回、実施後、3 ヶ月後に評価を行った。研究の実施にあたっては、国際医療福祉大学倫理審査委員会の承認を得た。この研究における COI は存在しない。

4. 研究成果

(1) 支援者研修プログラム

震災被災者および遺族支援者のための web サイト (<http://jdgs.jp/>)、行方不明者家族などあいまいな喪失の支援のための web サイト (<http://al.jdgs.jp>) の作成、管理をおこなった。また、各ウェブサイト、支援者が簡易に使用できるリーフレットなどをダウンロードできるようにした。

被災地での研修会の開催

・悲嘆講座(平成 24 年度 5 回シリーズ、平成 25 年度 2 日間集中)2 回、支援のためのコミュニケーション講座 1 回(平成 25 年度)、東日本大震災における喪失の支援シンポジウム(平成 25 年度)を開催した。

(成果)参加総数のべ 457 名で、各講座とも被災者支援をしている相談員・心理職・看護職・保健師・学校関係者・支援団体職員等が参加し、「とても良かった」「良かった」の回答が全体の 9 割を超えた。また、再度このような講座を受講したいという回答も、9 割以上であった。

・あいまいな喪失研修会

平成 24 年度は P. Boss 博士を招聘し、講演会(福島)、ワークショップ(岩手)を各 1 回、平成 25 年度は研修会・スカイプ事例検討会(福島)を 1 回、平成 26 年度はスカイプ事例検討会を岩手、福島で各 1 回ずつ開催した。

(成果)「とても良かった」「良かった」と回答した人は、平成 24 年度は 93%、25 年度は 89%、平成 26 年度は岩手で 100%、福島で 88%であった。P. Boss 博士の「あいまいな喪失」の書籍を翻訳し出版した。研修会の内容については、さまざまな研修会、学会・学会誌等で発表や報告、論文化した。

・被災地からの要請による研修会

岩手・宮城・福島を中心に「遺族支援に関する研修会」「支援者のストレス対策に関する研修会」「あいまいな喪失に関する研修会」など全 34 回開催した。

(成果)研修会終了後にアンケートを実施、90~100%の高い満足度が得られた。特に支援者のストレス対策の講座は被災地の要望が特に多かった。

これらの研修会の報告、被災地支援者に特に有用と思われた事柄や知見、海外研究者か

ら提供された資料を翻訳化したものについては、web サイトを通じて配信した。また報告書や論文としてまとめた。

・支援者の疲労・ストレス調査の実施

被災地の支援者 121 名に共感性疲労、K 6 などを用い、ストレス調査を行った。

(結果)47%の人が「とても疲れている」と回答し、心身のストレスも非常に高い状態であった。また、支援者自身も、震災により多くのものを喪失しており、約 3 割の人が強い喪失感をもっていた。

疲労に關与する要因としては、支援による 2 次的なトラウマやバーンアウトの得点は高値ではなく、むしろ震災による多くの喪失体験、睡眠や食生活などのライフスタイルへの影響等、支援者自身がかかえる問題が深く關与していた。仕事上の問題としては、支援者間の温度差や、目標や方向性が見えにくさの訴えがあった。

(2) 遺族・遺児支援プログラム

仙台・陸前高田・福島・宮古・釜石で月 1~2 回の子どものグリーフプログラムを開催し、延べ約 250 名の震災で大切な人を亡くした子どもたちが集まった。また、仙台市内の学習塾の協力により 30 名の子どもたちが家庭教師による学習支援を利用した。不登校であった生徒がグリーフプログラムに通いつつ、学習支援を利用し、結果、第一希望の学校に合格するなどの成果が出たケースもあった。

また、里親制度を利用しているケースでは保護者が保護者の会に参加しにくい状況や、里親とうまくいかないケースなどもあり、後見人制度などのサポートを利用するケースもあった。このようなケースは子どもたちが困難な状況に置かれているにもかかわらず、グリーフプログラムにも来られず、支援を受けにくい状況にあった。

(3) 複雑性悲嘆の認知行動療法プログラム(集団プログラム、インターネット治療プログラム)

集団プログラム

プログラムの開発

既存の複雑性悲嘆や悲嘆に対して有効とされている認知行動療法(Complicated Grief Treatment (Shear et al., 2005), Cognitive Processing Therapy (Resick et al., 1993))を参考に開発した。悲嘆についての心理教育(Step1, 1 回)と認知行動療法を主体とした Step2(5 回)によって構成される。1 回 2 時間、2 週間に 1 回の実施とした。1 つのグループは 6 人を目安とした。

対象

死別経験のある大学院生(16 名、2 グループ)、遺族支援業務に携わる支援員(14 名、2 グループ)計 27 名が治療に参加した(男性 7 名、女性 20 名;平均年齢 41.2 (SD±12.8))

の結果を分析した。

治療効果、有害事象

表1に治療前後におけるICGおよびBDI-の平均的を示した。2群間の平均値の差の分析には、Wilcoxonの符号付順位検定を行い、有意水準は $\alpha=0.05$ とした。

有害事象は報告されなかった。

表1 複雑性悲嘆症状および抑うつ症状のプログラム前後での比較

指標	治療前 平均 (SD)	治療後 平均 (SD)	p
ICG	8.9 (1.8)	7.1 (1.5)	.003
BDI	5.2 (1.1)	3.3 (0.7)	<.001

考察

複雑性悲嘆の集団認知行動療法プログラムを開発し、その有用性、安全性について健常者と対象とした予備施行を行った。健常死別経験者を対象としたため、治療前においてICGおよびBDI得点は低値であったが、治療後においてどちらも有意な軽減を示した。これは、正常な悲嘆であっても、罪悪感などにより苦痛を感じている状況があり、プログラムによって、認知的に修正されたことが考えられる。また、抑うつ症状については、プログラムの中に肯定的な認知の強化や行動活性化を含む要素があったことから有意な軽減を示したと考えられる。本研究から我々の開発した複雑性悲嘆の集団認知行動療法は、健常者に対して安全に施行することができ、悲嘆や抑うつ症状に有効であることが示された。今後は、複雑性悲嘆の患者に対する有効性を検討する予定である。

インターネット治療プログラム

専用ウェブサイト(複雑性悲嘆のための筆記療法(ITCGプログラム)研究ウェブサイト <http://www.j-itcg.jp/>)により募集を行った。広報は、遺族支援の関連機関、研修による周知、放送媒体によるウェブサイトへのリンク案内を行った。国内外から60件強の参加応募、問い合わせがあり、参加条件に合致し全回完遂が可能であったのは研究協力者14名(全員が女性)であった。プログラム中の有害事象の訴えは見られなかった。結果として評価尺度における症状悪化はみられなかったが、改善の程度には個人差が見られた。遠隔地への遺族支援に対する一定の効果は得られたが、今後はパソコン技能による参加条件の制限、またプログラム進行中の経過フォローの必要性、男性遺族への適応に関する課題について検討する必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計24件)

1) 黒川雅代子、瀬藤乃理子、石井千賀子：あいまいな喪失(Ambiguous Loss)～行方

不明者家族・故郷を失っている方への支援事例検討会報告～家族療法研究、32、2015(査読無)(印刷中)

2) 瀬藤乃理子、坂口幸弘、黒川雅代子、丸山総一郎：東日本大震災における支援者のストレス、産業ストレス研究、21、271-277、2014(査読有)

3) 瀬藤乃理子、石井千賀子、清水ミシェル・アイズマン、黒川雅代子：スマトラ沖地震の知見を日本の震災支援に生かす取り組み～「Help the Hospices Tsunami Project」報告書の提言を受けて～、甲南女子大学研究紀要看護リハビリテーション編8、61-70、2014(査読無)

4) Ando M.、Sakaguchi Y.、Shiihara Y.、Izuhara K.：Universality of Bereavement Life Review for Spirituality and Depression in Bereaved Families, American Journal of Hospice and Palliative Medicine, 31(3), 327-30, 2014(査読有)

5) 石井千賀子、瀬藤乃理子：家族療法に基づく「あいまいな喪失」への支援～福島における支援者支援の経験から～、家族療法研究、31、101-105、2014(査読無)

6) 中島聡美：自死遺族の複雑性悲嘆に対する心理的ケア・治療。精神科、25(1)、57-63、2014(査読無)

7) Nakajima S.：Bereavement and Grief Caused by the Great East Japan Earthquake, ADEC Forum, 40(2), 17-18, 2014(査読無)

8) 黒川雅代子、石井千賀子、瀬藤乃理子、中島聡美：シンポジウム報告 東日本大震災における喪失への支援～コミュニティの再生をめざして～、死生観と超越・仏教と諸科学の学際的研究報告書、龍谷大学、2013(査読無)

9) Setou N.、Takada S.：Associated factors of psychological distress among Japanese pediatricians in supporting the bereaved family who has lost a child, Kobe Journal of Medical Sciences, 58(4), 119-127, 2013(査読有)

10) 瀬藤乃理子、丸山総一郎：バーンアウトと共感性疲労～対人援助スキルトレーニングの必要性～、産業ストレス研究、20、393-395、2013(査読無)

11) 瀬藤乃理子：視察報告 被災地の支援者支援の課題～被災地での遺族支援活動の中でみてきたもの～、甲南女子大学研究紀要看護リハビリテーション編7、49-55、2013(査読有)

12) 高橋聡美、佐藤利憲、西田正弘：東日本大震災で大切な人を失った子どもたちへの心の支援、安全教育学臨時号、12(2)、47-60、2013(査読有)

13) 高橋聡美：東日本大震災における遺族・遺児支援、医療保健学研究つくば国際大学紀要、第4号、2013(査読有)

- 14) 中島聡美：喪失と悲嘆のケア - レジリエンスに焦点を当てたケア・介入、週間医学のあゆみ、247(4)、375-377、2013(査読無)
- 15) 黒川雅代子、瀬藤乃理子、村上典子、中島聡美、伊藤正哉：災害グリーフサポートプロジェクト、EMERGENCY CARE、25(9)、885-890、2012(査読無)
- 16) 黒川雅代子：家族・遺族の悲嘆学 - 悲嘆反応を理解してかかわる -、救急看護&トリアージ、4・5月号、59-63、2012(査読無)
- 17) 瀬藤乃理子、中島聡美、丸山総一郎：自然災害における被災者遺族・行方不明者家族への精神的影響、産業精神医学、20 巻特別号、80 - 92、2012(査読無)
- 18) 瀬藤乃理子、石井千賀子：災害医療における家族サポート～行方不明者家族への支援～、JIM、22(11)、824、2012(査読無)
- 19) 高橋聡美：東日本大震災における遺族の現状とグリーフケア、日本トラウマティック・ストレス学会、10(1) 65-70、2012(査読無)
- 20) 伊藤正哉、中島聡美、金吉晴：災害による死別・離別後の悲嘆反応、トラウマティック・ストレス、10(1)、53-57、2012(査読有)
- 21) 中島聡美、伊藤正哉、村上典子、小西聖子、白井明美、金吉晴：災害による死別の遺族の悲嘆に対する心理的介入、トラウマティック・ストレス、10(1)、71-76、2012(査読有)
- 22) Nakajima S.、Masaya I.、Akemi S.、Takako K.：Complicated grief in those bereaved by violent death: the effects of post-traumatic stress disorder on complicated grief, Dialogues Clin Neurosci、14(2)、210-214、2012(査読有)
- 23) 中島聡美、瀬藤乃理子、村上典子、黒川雅代子、伊藤正哉：災害グリーフサポートプロジェクト(JDGS)、日本医事新報、4592、46-47、2012(査読無)
- 24) 中島聡美：がんの遺族における複雑性悲嘆とその治療、ストレス科学、27(1)、33-42、2012(査読有)

〔学会発表〕(計 23 件)

- 1) 黒川雅代子：あいまいな喪失への介入、シンポジウム災害後の複雑性悲嘆の予防および治療的介入、第 14 回日本トラウマティック・ストレス学会、2015.6.20.、京都テルサ(京都府・京都市)
- 2) 瀬藤乃理子：ウェブサイトによる悲嘆・複雑性悲嘆の理解の促進、シンポジウム災害後の複雑性悲嘆の予防および治療的介入、第 14 回日本トラウマティック・ストレス学会、2015.6.20.、京都テルサ(京都府・京都市)
- 3) Nakajima, S.：Complicated grief among women: From the perspective of attachment and caregiving. Symposium” Psychiatric treatment of traumatized women in Japan”, IAWMH2015、2015.3.23.、京王プラザホテル(東京都・新宿区)

- 4) Nakajima, S.：Complicated grief in women whose bereavement was caused by violent death .Symposium23“Gender Based Violence and Trauma”, the 5th World Congress of Asian Psychiatry (WCAP2015)、2015.3.5.、九州大学医学部百年講堂(福岡県・福岡市)
- 5) 瀬藤乃理子：マインドフルネス認知療法に基づく支援者のストレスケア～ストレスへの気づきと対処～、大阪医科大学第 6 回がんセンター講演会、招待講演、2015.3.10.、大阪医科大学(大阪府・高槻市)
- 6) 瀬藤乃理子：被災地における支援者のためのストレスケア・プログラム、神戸大学主催災害時の要援護者に対する支援セミナー、2015.2.22.、ラッセホール(兵庫県・神戸市)
- 7) 高橋聡美、川井田恭子、佐藤利恵：大切な人を亡くした子どものプログラム、いのちの教育学会、2015.3.7.、大正大学(東京・豊島区)
- 8) 畠山明、高橋聡美：喪失体験後の子どもの学習支援、いのちの教育学会、2015.3.7.、大正大学(東京・豊島区)
- 9) 久保田千景、山崎達枝、黒川雅代子、石田真由美：災害時における遺族支援(ワークショップ)、日本災害看護学会第 16 回、2014.8.20.、工学院大学(東京都・新宿区)
- 10) 白井明美、中島聡美、小西聖子：筆記を用いた複雑性悲嘆の認知行動療法の実践、シンポジウム D-3 複雑性悲嘆の日本における実態と治療介入の実践、第 13 回日本トラウマティック・ストレス学会、2014.5.18.、コラッセふくしま福島(福島県・福島市)
- 11) 中島聡美、伊藤正哉、瀬藤乃理子、鈴木友理子、金吉晴：複雑性悲嘆の概念の変遷 - DSM-5 を踏まえて -、シンポジウム D-3 複雑性悲嘆の日本における実態と治療介入の実践、第 13 回日本トラウマティック・ストレス学会、2014.5.18.、コラッセふくしま福島(福島県・福島市)
- 12) 中島聡美、伊藤正哉、白井明美、小西聖子：あいまいな喪失を経験した遺族への複雑性悲嘆療法の適用、日本心理臨床学会第 32 回秋季大会シンポジウム(事例研究) SA4、2013.8.27.、パシフィコ横浜(神奈川県・横浜市)
- 13) 瀬藤乃理子、中島聡美、村上典子、黒川雅代子：被災地における支援者のストレスー現地支援者への調査結果からー、第 12 回日本トラウマティック・ストレス学会、2013.5.12.、帝京平成大学池袋キャンパス(東京都・豊島区)
- 14) 黒川雅代子、村上典子、吉永和正：DMORT(ディモート：災害死亡者家族支援チーム)研修会・入門編、第 12 回日本ストレスマネジメント学会、招待講演、2013.7.28.、日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田看護短期大学(秋田県・秋田市)
- 15) 瀬藤乃理子、石井千賀子：あいまいな喪失への支援～JDGS プロジェクトの支援者支

援活動を通して～、第 30 回日本家族研究・家族療法学会、2013.6.22.、タワーホール船堀（東京・江戸川区）

16) 瀬藤乃理子：被災地における被災者および支援者のストレス～発災 1 年半後の現状～、神戸大学都市安全研究センター第 2 回災害弱者支援研究会、2013.2.24.、ラッセ神戸（兵庫県・神戸市）

17) 白井明美、中島聡美、小西聖子：WAGNER Birgit 複雑性悲嘆のための筆記療法プログラム開発に関する予備研究、日本トラウマティック・ストレス学会 11 回大会シンポジウム、2012.6.9.、クローバープラザ（福岡県・春日市）

18) 白井明美、中島聡美、小西聖子：複雑性悲嘆のための認知行動療法をベースとした筆記療法プログラムの開発に関する予備研究、日本心理臨床学会 31 回大会、2012.9.14.、愛知学院大学（愛知県・日進市）

19) 瀬藤乃理子、石井千賀子、小笠原知子：あいまいな喪失体験とともに生きる～行方不明者家族への支援～、第 29 回家族心理学学会、2012.7.14.、東京学芸大学（東京都小金井市）

20) 瀬藤乃理子：被災地の遺族支援の課題、神戸大学都市安全研究センター第 1 回災害弱者支援研究会、2012.8.18.、仙台カルチャーホール（宮城県・仙台市）

21) 高橋聡美：東日本大震災と震災遺児 関西学院大学公開セミナー、20120523.、東京駅日本橋口サピアタワー（東京・千代田区）

22) 高橋聡美、黒川雅代子：特別対談 東日本大震災の悲しみに寄り添う、第 5 回日本スピリチュアルケア学会学術大会、2012.9.29.、龍谷大学（京都府・京都市）（招待講演）

23) 高橋聡美：大切な人を失くした子どものサポート、シンポジウム東日本大震災を生きる家族の理解、招待講演、第 19 回日本家族看護学会学術総会、2012.9.8.、学士会館（東京・千代田区）

〔図書〕（計 8 件）

1) 丸山総一郎編、瀬藤乃理子ら共著、創元社、第 12 終末期および死別の支援とストレス～援助者の共感性疲労・バーンアウトとその対策～（2015 春刊行予定）

2) ポーリン・ボス著、中島聡美、石井千賀子監訳、誠信書房、あいまいな喪失とトラウマからの回復、家族とコミュニティのレジリエンス、（分担翻訳）白井明美、瀬藤乃理子 2015.（382(1-33, 52-104, 247-304)）

3) ジュディス・A・コーエン、アンソニー・P・マナリノ、エスター・デブリンジャー著、白川美也子、菱川愛、富永良喜監訳、金剛出版、子どものトラウマと悲嘆の治療～トラウマ・フォーカスト認知行動療法マニュアル、（分担翻訳）白井明美、2014.（296(212-228)）

4) 中島聡美、少年写真新聞社、体と心 保健総合大百科 保健ニュース・心の健康ニュース・縮刷活用版、2014、中・高校編、2014、

(291(119, 121))。

5) 鈴木友理子、中島聡美、中山書店、DSM-5 を読み解く、伝統的精神病理、DSM-5、ICD-10 をふまえた新時代の精神科診断 4、不安症群、強迫症および関連症群、心的外傷およびストレス因関連障害群、解離症群、身体症状病および関連症、2014.（255(179-186)）

6) 中島聡美、羊土社、プライマリ・ケアにおける「遺族ケア」、堀川直史編、ジェネラル診療シリーズ あらゆる診療科でよく出会う 精神疾患を見極め、対応する、2013.（284（157-159））

7) 西田正弘、高橋聡美、梨の木舎、死別を体験した子どもによりそう—沈黙と「あのね」の間で、2013.（124）

8) 子どもグリーンサポートステーション、高橋聡美（監修）、梨の木舎、子どものグリーンを支えるワークブック—場づくりに向けて、2013.（105）

〔その他〕

1) 複雑性悲嘆のための筆記療法 (ITCG プログラム) 研究ウェブサイト <http://www.j-itcg.jp/>

2) 震災で大切な人を亡くされた方を支援するためのウェブサイト <http://jdgs.jp/>

3) 「あいまいな喪失」情報ウェブサイト <http://al.jdgs.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

黒川 雅代子 (KUROKAWA, Kayoko)
龍谷大学短期大学部社会福祉学科・准教授
研究者番号：30321045

(2) 研究分担者

坂口 幸弘 (SAKAGUCHI, Yukihiro)
関西学院大学人間福祉学部・教授
研究者番号：00368416

白井 明美 (SHIRAI, Akemi)
国際医療福祉大学・准教授
研究者番号：00425696

瀬藤 乃理子 (SETOU, Noriko)
甲南女子大学・准教授
研究者番号：70273795

高橋 聡美 (TAKAHASHI, Satomi)
防衛医科大学校・教授
研究者番号：00438095

中島 聡美 (NAKAGIMA, Satomi)
国立研究開発法人国立精神・神経医療センター精神保健研究所・犯罪被害者等支援室長
研究者番号：20285753